

吉田松陰の思想（Ⅳ）

岡 崎 正 道

はじめに

これまで「吉田松陰の思想」Ⅰ・Ⅱ・Ⅲを執筆し、それぞれにおいて、松陰の天皇観の本質、民本主義的性向の濃厚な人民観と経世論、対外観の真姿という問題を究明してきたつもりである。松陰の思想にはこのように留意すべき骨柱がいくつもあり、その各々の中でも一見矛盾するような言説が随所に伺われる上、これらの骨柱自体も必ずしも理路整然たる体系をなしているわけではない。だから彼の思想（及び行動）のどの面にスポットを当て、どの部分を強調するかによって、様々な松陰論が生まれてしまう嫌があることは否定できない。戦前戦後を通じて吉田松陰に対する評価が一定せず、その時代々々の社会状況等にも少なからず影響されることがあるのはそのためと考えてよい。しかしある意味では、そのことが松陰の魅力であり、かつ存在感の重さを証しているとも言えるのではないか。

本稿は4部構成の松陰論の仕上げとして、彼の革命思想の真髄たる“草莽崛起論”を中心に論述を進めたいと思う。

1

明治期日本の言論界の麒麟児徳富蘇峰は、名著『吉田松陰』（1893年、民友社）の中で次のように格調高く謳い上げた。

彼（松陰）は多くの企謀を有し、一の成功あらざりき。彼の歴史は蹉跎の歴史なり。彼の一代は失敗の一代なり。然りと雖も彼は維新革命に於ける、一箇の革命的急先鋒なり。

（傍点は徳富）

彼の改訂本で「忠君愛国主義」の代表選手の座に松陰を祭り上げることになる徳富蘇峰であるが、自由民権思想の成果も受けて、この時期はまさしく“革命家”として松陰を捉えていたのである。

「革命的急先鋒」としての松陰の気概は、ペリー来航の衝撃によって高揚していった。

浦賀の事、古今未曾有の大変、国威の衰頹ここに至る…方今昇平三百年、俯察仰觀するに漸く変革の勢を兆す。¹⁾

風雲の予感¹⁾は彼をして、変革の兆しを察知せしめた。それも微温的ではなく、現体制を根底から覆すほどの激動が必然的に訪れることを、彼は直感的に捉えた。

1) 兄杉梅太郎宛書簡、大和書房『吉田松陰全集』第七巻171頁。以後当全集からの引用の場合は、本文中に(⑦171)のように略記することとする。

変革の勢の由て来る所は漸なり、固より一日に非ず。而して本邦中に就いて変革を相するものは、百千と雖も吾れ憂なくして可なり。今の変革は即ち然らず。(同前)

黒航来航以前から松陰は太平安逸の弊を難じ、一朝事ある時に備えて心身の練磨に努めると共に、治に居て乱を忘れたる世人達に対し鋭い警鐘を発してきていた。滄海桑田定まりなき世の転変の本質を、彼は的確に認識していた。

夫れ天下の勢、治まれば即ち楽しむ。楽しむれば即ち怠る。怠れば即ち乱る。乱るれば即ち憂へ且つ勤めて、治これに従ふ。故に隆なるものは必ず替へ、屈するものは復た伸ぶ。

(①292)

この認識をもとに、早くから天下の変の初期微動を覚知していた松陰は、黒航到来にいよいよ本格的震動の始まりを感じ取ったのであり、同時にそれがやがて革命という大激震にまで高揚せずにはいないであろうことを確然と予想し得たのである。

さて松陰がペリーの船に乗り込んで欧米密航を企てるも事成らず、捕縛されて萩野山獄に幽囚の身となり、この間同獄の囚人仲間と学習会を催すなど渾身の活動に精励、出獄後は実家杉家に閉居しつつ松下村塾を主宰して学問と教育に打ち込んでいた過程については、紙幅の都合もあり詳述を控えるが、この間一すなわち安政年間一の日本は、まさに老朽化した小舟をもって荒海に乗り出したような苦闘の歴史を綴っていた。

日米和親条約締結後、1856年7月に着任したアメリカ総領事タウンゼント・ハリスによる通商条約の要求は、10月に勃発したアロー号戦争の情報が伝わるに及んでいよいよ本格化した。姑息な便法に終始する幕府は、対外強硬論を懸命に抑えつつハリスとの接触を余儀なくされていったが、そのさ中の1857年6月幕閣の逸材老中阿部正弘が病没すると、幕府は烏合の集団に近い状態となった。同年10月参府登城して将軍(徳川家定)に謁したハリスは条約の具体的交渉開始を要求、幕府も「蘭癖」老中堀田正睦の首導のもとこれに応じ、翌1858年1月には条約草案についての基本的合意が成立する。

一方阿部正弘亡き後、諸藩の有志による政治論議、幕府への容喙は活発となり、弱腰の現首脳に代わる協力的なガバナビリティを持った指導者を待望する空気が急速に高まった。それは病弱で無能(不能)の将軍家定の後継者を巡る、一橋派と南紀派の対立抗争(将軍継嗣問題)となって顕現し、時代の風雲を惹起するのである。

江戸城溜問詰の譜代大名と大奥などから成る南紀派(紀州の徳川慶福擁立派)は、開国政策への批判を封殺して幕府の独裁権回復を狙い、そのための条約勅許を要請して朝廷に工作する。これに対し一橋派(一橋慶喜擁立派)は、基本的に開港に賛成の親藩・外様雄藩と、断固攘夷の貫徹を叫ぶ水戸藩士を中心とする激派との連合勢力で、前者は条約勅許には反対しないが同時に慶喜の将軍就任を勅意をもって実現しようと朝廷に謀り、後者は条約粉碎を目指して攘夷派公卿に接近する。

一橋派と南紀派の相剋と言っても決して単純な二元的対立ではなく、開国と攘夷、尊王と佐幕、反幕と公武合体等様々な要素が微妙に絡み合っていたために、この時期の政治状況は極めて複雑な様相を呈し、松陰の一角相矛盾する対外論にも影響を与えている。そしてこれらの諸勢力はそれぞれの思惑を秘めながら、いずれもが朝廷に対する働きかけを行なったから、朝廷の発言力はおのずから高まったが、それでも長年政治から疎外されてきた彼らに高度な判断を期待するのは無理というものであった。双方より頼られた朝廷だが、孝明天皇をはじめ公卿の多くは外交には一もとより内政にも一無知で、ただファナティックな排外論を呼号するだけであつたし、幕府に買収されて開国論に転じた関白九条尚忠のように、無定見な者も決して少なくない有様だったからである。

1858年3月朝廷は条約調印拒否の勅諭を渙発、ために朝廷を籠絡せんとした幕府の意図は崩れ、対幕批判の高まりの中でタカ派路線が台頭してくる。即ち同年4月南紀派は彦根藩主井伊直弼を大老にかつぎ出し、井伊は無勅許のまま独断で条約に調印するとともに、紀州慶福(家茂)の將軍継嗣決定を強行した。そしてこの専断を非難した徳川斉昭ら三大名を処分しながら、一方で老中間部詮勝を上京させ、威圧と懐柔をもって朝廷を説得にかかる。

井伊大老を筆頭とする南紀派のかかる強硬路線は一橋派を激昂させ、攘夷・開国と思想的には不統一だった彼らを反井伊(反幕閣)の一線で結束させることになる。8月朝廷は幕府の方針を批判する「戊午の密勅」を幕府及び水戸藩に向けて発し、さらにその回達を水戸に要請する。このような事態の推移を不快に覚えた井伊派は反対勢力の弾圧に乗り出し、かくして安政大獄の嵐が吹き荒れることになるのである。

さて時勢の展開に敏な松陰は、出獄後の読書と著述と教育の比較的平穏な生活にとどまらず、1857年後半頃より再び政治活動に動き出した。山県太華・月性・黙霖らとの論争、梅田雲浜らとの関わり合いの中で“恋闕”の情念に身を焦がし、対外「侵略」の壮語を繰り返してもいた松陰であるが、久坂玄瑞・高杉晋作等有力な人材の入門相次いだこの時期、いよいよ彼自身の生死を賭した闘いの中に身を投じていくこととなる。

塩谷宕陰…言へるあり、「謂ふなかれ、霸興って靈凶蠢を生ずと。幕府開かれてより鼎重倍々固し…」と。又高山・蒲生の伝に言へるあり、「覇府の立ちてより天子威福を関東に譲り、南面して己れを恭しみたまふ。而して幕府も亦能く臣節を尽し、帝沢愈々光やく」と。(丁巳幽室文稿、1857年閏5月、④88)

黙霖や山県太華の白熱の論争を通じて討幕論の界域に大きく踏み込んでいた松陰には、このような尊王敬幕の美辞は得心のゆくものでは既になく、ただ偽瞞の臭気を感じるのみであった。

果して此の説の如くならば、即ち在昔皇室の全盛は反って今日の衰頹に如かず、今日衰頹の皇室は乃ち劍靈久遠の盛事なり。而るに志士仁人書を読み時を憂ふるは、果して何の為ぞや…今日江戸の勢焰なる、凡そ臣子たる者或は憤懣罵詈し、或は号泣諫争す。皆正士仁人たるを失はず。(同前)

天下に正義を打ちたてるためには、いつまでも幕府の威権に顧慮を払い続けるべきではないという思考に、彼は漸く到達した。敬幕から反幕・批幕、そして討幕へと、着実に歩を進めゆく松陰の思想的成長の姿をここに読み取ることができる。²⁾

孟子の「一夫紂を誅するを聞けども、未だ君を殺すを聞かず」の立言の可否を問ふを承く。放伐は自ら是れ聖人の大権にして、所謂伊尹の志あらば即ち可なれども、書生の紙上に議すべき所に非ざるなり…然れども…聖賢の作用、又儒者庸常の論に非ざるなり。故に孔・孟・湯武の旨をして後世に荒れしめ、仁を賊ひ、義を賊ふの人をして民の上に安然たらしむるものは、皆議論の弊なり。近時大塩氏起るや頗るここに見るあり。而れども才なく略なくして徒らに覆敗を致し、人をして懊恨已まざらしむ。特だ之れを後來仁義の人に望むのみ。吾れは即ち儒夫なり。尚ほ湯武を論ずるすら且つ為さず、何ぞ況や孟子の立言をや。

(無逸(吉田栄太郎)の問に答ふ、1857年11月、④153)

吉田栄太郎(稔磨)は高杉・久坂・入江九一と並んで「松下村塾の四天王」と称され、後被差別部落民から成る屠勇隊(奇兵隊・力士隊等と共に長州藩諸隊の一つ)を組織、禁門の変の

2) 吉田松陰の尊王討幕思想の形成に関しては、既に拙稿「吉田松陰の思想 (I)」(アルテスリベラレス第65号)において考察を行なっているので参照して頂きたい。

直前池田屋で新選組と闘い、一旦は脱したが、再度仲間の救援に引き返しついに自刃。師松陰の精神を最も忠実に受け継いだ人物（司馬遼太郎「街道をゆく」）と称される。

この柴太郎が「孟子」の一節を引いて、「殷の紂王のような悪逆な君主は単なる匹夫にすぎないから、これを討滅してもよいのか？」と問うたのに対し、松陰は「夏王朝の暴君桀王を討ち、湯王による殷王朝創成を助けた聖人伊尹のような無私の志があるなら、そうした行為も許される。しかし未熟な書生が空論として論ずべき問題ではない」と返答する。但書を付しながらも、基本的には放伐を肯定している。紂は桀と並ぶ古代中国の悪王であり、最高権力者である。師弟二人が暗黙のうちに、紂を徳川幕府に擬していることは間違いない。非現実的な観念論は戒しめながらも、一般論として討幕は是であると松陰は言明しているのである。さらに松陰は、現在は放伐を実践する資格のある仁義の聖人がいないことを慨嘆し、大塩平八郎がそれに近い線まで行ったのに「才略不足ゆえに覆敗」してしまったことを「懊恨」している。将来「仁義の人」が出現して大塩の素志を継ぐことを期待しつつも、自身は「懦夫」ゆえその器でないと謙遜しているが、実は内心端倪すべからざる抱負を抱いていたに相違ない。

「伊尹の志」については、「講孟余話」の中で次のように論じていた。即ち「孟子」の書を積んだ船は途中で転覆沈没するという伝説の根拠となるほどに過激な、「曰く、君大過あれば則ち諫め、之れを反復して聴かざれば則ち位を易ふと。王（斉の宣王）勃然として色を变ず」（万章下篇末章）というくだりを、松陰は次のように論評する。

或ひと問ふ。前輩或は此の章を疑ひて纂弒の端を開く、聖賢の言に非ず、宜しく削り去るべしと云ふ、如何…孟子曾て言あり。伊尹の志あれば可なりと。一語已に尽せり。伊尹の志は国家を憂ひ生民を憂ふるのみにて、一点の私心にあるに非ず。此の志已に自ら信じ、天地宗廟へ対越して毫も懼るる所なし。天下後世へ揭示して毫も愧づる所なし。天地宗廟、天下後生、皆伊尹の私心なきを信じて敢て一の間然するものあらず、是れ伊尹の志なり…何ぞ必ずしも此の章を削り去ることを用ひんや。（③234～236）

伊尹の志とは畢竟、いささかの私心＝利己心をも有せず、ひたすらに国家と人民のみを憂えることである。かかる大義があるならば、放伐革命は是認されるということにはかならない。

2

松陰が尊王思想をより純粹なものへと昇華せしめるのと比例して、反幕の意識を高揚させていく点については既に述べた。³⁾ また彼が自身も身を置く武士階級の当為と倫理性（士道）の徹底化を真摯に模索し、他方被支配人民に対する愛惜と強いシンパシーを感得していく様についても既に論じた。⁴⁾ さらに彼の開国攘夷論と呼ぶべき対外観は、西洋文明の真当な評価と同時に独立不羈の精神を生み出し、そのことが徳川政権否定の大きな論拠となっていく事情についても既に論じたところである。⁵⁾ かく尊王論、民本主義と士道論、そして対外観という三つの軸を基に形成され発展してきた松陰の思想は、1858年幕府の違勅条約調印を大きな契機として討幕論に結実し、大胆な体制変革の叫びへと展開することになる。

3) 拙稿「吉田松陰の思想（Ⅰ）」

4) 拙稿「吉田松陰の思想（Ⅱ）」（アルテスリベラレス第66号）

5) 拙稿「吉田松陰の思想（Ⅲ）」（アルテスリベラレス第68号）

当今夷狄猖獗にして幕府跋扈し、天下の事、変革將に至らんとす。有志の士、孰れか王事に勤むることを欲せざらん。苟も王事に勤めんと欲せば、決して独立能く為す所に非ざるなり。隣国の交、今に於て急と為す。

（戊午幽室文稿、富樫文周を送る紋、1858年8月、④411）

王事に勤むる勤王こそ、彼が欲しかつ予期してきた「変革」実現の捷徑なのだと、今松陰は思う。幕府の対外政策の誤りを戒しめ、各藩に行動を促す勅諭こそ、その導火線となるはずだと彼は確信していた。

此の度、勅諭、幕府・尾張・水戸等に降り候由、実事に候へば誠に天下の一大事と相考へ、別封一通差出し申し候。

（益田弾圧宛書簡、1858年8月、⑧94）

この「天下の一大事」を前にして、觀望自重の如きは決して許されない。直ちに長州藩が先陣を切るべきだと彼は言う。

頃う伏して時勢を考ふるに、幕政既に是くの如し。竦座誠に思ひて寒心せし所のもの、卒かに廷議の決する所となる。臣聞きて喜び起つ。叡慮の明断、公卿の英決、誠に仰いで頼るべく、伏して重んずべし。果して皇国神尚ほ真に在すなり。然れども事、実に是に至る。乃ち叡断の出づる所、独り違勅討伐の命あるのみ。呼、是の命に至りては、則ち宸襟の戚其れ果して如何ぞや。臣逆旅に在りて憂苦寝ねられず。

（益田宛書簡、1858年9月、⑧102～103）

叡慮が決して討幕にはなかつたばかりか、むしろ孝明帝の意志は佐幕であったことは戊午の密勅の内容からも明らかである。松陰とてあの勅書から討幕の旨趣を読み取るのは不可能であることに、気づかぬわけはない。それにもかかわらず彼が「叡断の出づる所、独り違勅討伐の命あるのみ」と強弁し、「宸襟の戚」を慮るなど空々しくさえ思えるほどの「憂苦」に煩悶するというのは、一体何故であるのか。松陰は決して方便で偽りを言う人間ではなく、これは紛れもない彼の本心なのである。即ち自分が目的として抱持する討幕の大義は、当然ながら恋闕の熱誠を捧げ続けてきた天皇の意志とも合致するはずだ。そうでないはずはない、否そうであってほしい。かかる信念と願望とが脳中で混淆したとき、現実を履き違えたかのような発言がなされたのである。単なる独善と言え言えなくもないが、彼の恋闕の熱情たるや、常人の感覚を超絶したところがあった。ともあれ松陰は素朴にも、天皇の真意が討幕にあると確信した。従って志操ある者はこの叡慮に忠実に起たねばならぬと信じた。誰がその先駆となるべきかと言え、それは無論長州藩である。

ひそかに列藩を觀るに、固より皆頼るべからざるに非ず。正論憤発も亦あり。是の時に當りて、決して傍觀の意を挾むのみに非ず。但だ朝廷と諸侯と隔絶すること二百余年なり。是に於て朝廷果して大命を誰れに委ねんや。亦義仲・董卓の畏れあり。諸侯果して孰れか挺出して、自ら此の命に任せんや…今夫れ天下の義勢の唯沮情に屈す。敵して之れを通じ、引きて之れを申し激して発せしめ、整へて之れを挙ぐ、所謂義倡なり。是れを以て賊を誅して夷を攘ふべく、天下の諸侯誰れか之れに背くものぞ。其の策は曰く、「誠なれば以て成り、私を挾めば決して成らず」と。臣私かに列藩を察するに、任ずべきもの甚だ希なり。且つ此の任肯へて之れを他藩に委ねんや。我が公これに在り。公其れ此れに重任せんかな。

（同前）

およそ10年前「吾が邦には自ら恃むべきものあり」として、「封建の候伯」をその筆頭に挙げた松陰の心情は、幾多の曲折を経つてもこの段階でなお保持されていた。もとより個々の政策等を取り上げれば様々な批判もあるが、この国難に際してはまず彼らに頼らざるを得ないと

いう気持ちは当然働いた。そして中でも我が長州藩が先陣とならねばならぬと考えたわけだが、これは狭隘な藩意識などというよりも、己の主君に一番乗りを果たさせたいという素朴な人情と解する方がよさそうである。彼は長州藩を先頭に押し立てた奉勅討幕の決行を、真顔で藩の国相たる益田弾正に説いたのである。

当然ながら藩政府は驚愕した。可能なはずがないことを、そして他の誰一人考えもしないことを、天皇の意志と称して吹聴し実行を迫る、この疫病神の如き男に辟易したはずである。そもそも勅文のどこにも「討幕」の一文字もないのだから、これは明らかに松陰が勅意を歪曲していると見た。従って、かかる妄言は黙殺するに如かずと皆思った。吉田松陰というあたかも時限爆弾のような男を抱えておくのは、藩にとって頗る危険と判断した。

松陰とて、そうした藩庁の空気を全く感じ取れなかったわけではない。やはり封建権力に多くを望むのは誤りであるかもしれないと感じ始めた。

天子の勅、幕府の奉ずる能はざるは、責尾・水・越に在り。尾・水・越の奉ずる能はざるは、責諸藩に在り。天下諸藩の奉ずる能はざるは、責草莽豪傑に在り。草莽豪傑上天下諸藩と幕府とを責め、万々従はざれば、死を以て之れを争ふ、正義と謂ふべし。身を以て之れに任ず、大忠と謂ふべし。此の論明白、疑を容るる所なし。

(戊午幽室文稿、生田良佐の邑に帰るを送る叙、1858年9月、④416)

ここについて「草莽」が登場する。それも幕府・諸藩という封建権力と相対立する存在として認識されている。それは「正義」であり、その戦いで草莽側に参ずることは、「大忠」だと言う。「忠」は通常主君に勤仕することを意味するが、松陰にあつてはこれに反逆することもまた「忠」なのである。この精神が、数ヶ月後の「僕は忠義をする積り、諸友は功業をなす積り」という有名な発言につながっていく。

こうして結局は草莽豪傑の「正義」に依拠せざるを得ないことを悟り、「明白、疑を容るる所なし」と断じた松陰ではあるが、それでも現実には依然諸侯達の英断に期待をつないでいた。しかるに事態は遅々として好転せず、逆に安政の大獄が着々進行していたのである。即ち9月7日には梅田雲浜、18日に鶴飼吉左衛門・幸吉父子及び飯泉喜内、22日に頼三樹三郎と小林良典が逮捕されていたし、この後も27日に日下部伊三次、10月23日には橋本左内が縛に就くことになる。

こうしたニュースは逐次松陰の耳にも届いてきたと思われるが、彼はかかる情勢に鑑みて、諸侯頼むに足らずという考えに傾いていく。

某ひそかに時勢を観察するに、宝祚無窮の大八洲、存亡誠に今日に迫れり…抑々徳川家征夷將軍に任ぜられてより以来、外夷控馭の策著々其の宜しきを失はれたることは一朝一夕の事には非ざれども、中に就きて近来墨夷の事起りし以来、弥々以て内外失策のみ行はれ、条約調印に至りて極まれり…水戸は奸臣の輩父子の間を離間し、内輪甚だ不協和…尾張も元來天下の務に疎き国風にて竹腰如きの奸物甚だ跋扈する由。されば天下頼むべき諸侯は至って少なく、勤王の事は思ひも寄らぬ事なり…当今二百六十諸侯大抵膏粱子弟にて、天下国家の事務に迂濶にして、殊に身家を顧み時勢に媚諛し、其の臣なる者御大事御大事と申す事にて其君をすくめ、勤王の大義などは夢にも説き及ぼさず、何程聡明果斷の人君ありとも、決して義拳を企つこと相成らぬ勢なり。是れ尋常の諸藩然り。其の奸悪なる者に至りては幕吏に連結し、其の逆焰を助長する類少なしとせず。然れば当今天下の諸侯を御待ちなされては、終に幕府の議に落ち伏せ、其の末は外夷の属国と相成り、皇国の滅亡実に踵を旋らさざることなり。真に此の趣御落著遊ばされたらば、天下万民の信服仕り、義憤を激発するの御処置あらまほしきことなり。

(戊午幽室文稿, 時勢論, 1858年9月, ④417~419)

この所論において松陰は、徳川幕府累代の悪政を明確に指弾する姿勢を見せている。「大八洲の存亡」に関わる今日の事態を招来した責任は幕府の歴年の失政にあり、「外内失策」の極まるどころが今次の不平等条約調印だという認識である。その点同じく安政大獄の犠牲となった越前藩の俊傑橋本左内が、「近来幕府…暴逆苛烈の悪政も之れ無く」(三条実万宛呈書)⁶⁾と基本的に幕府を支持したのとは大きく異なる。

「皇国の滅亡」が目睫の間に迫っている今日の危機を打開する、主体はいずこに求められるべきであるのか。これまで期待を抱いてきた雄藩(水戸・尾張等)もその本質を顧みれば「奸物跋扈」し、藩主とその一族も贅に溺れて艱難辛苦を忘失、政治の要務にも「迂濶」で剩えお家のみを大切に考え、時世に阿ねる。さらに邪悪な臣下がこれに媚びへつらい、到底「勤王」どころの話ではない。最悪の藩になると、反幕・批幕どころか逆に幕府の虐政に加担追従する有様である。かかる窮状を突破する頼みは、「天下万民の義憤」以外にない。

松陰はこの論稿を京都の公卿大原重徳に送り、もって朝廷を動かそうと企図した。しかし元来公武合体論者たる大原—この4年後幕政改革を促すため島津久光と共に下江—は結局起らず、従って朝廷も動かずに終わった。所詮松陰の“恋闕”は幻想に終始したのである。

だが松陰は、頼むべき力を草莽に見い出しても、依然長州藩だけは別だと信じている。

諸侯待むべからず、草莽の志士を募ると申す事、大坂陣等の覆轍をのみ思ひ合はせ、一概に危ふき事の様申す者も御座候へども、是れは事の本末を考へざるの論に御座候…彼の募りに応ずるの志士に至りては、禍福死生已に其の念を断ち、大節大義を天下後世に建明せんと欲する者の儀に候へば、所謂一騎当千なる者にして、徳川は已に衰運に趨き候折柄の儀に候へば、大坂陣と同日の論には御座なく候。(同前)

草莽の志士を長州に結集し、「衰運に趨き」つつある徳川への闘争を挑む。大坂の陣の如き蹶跌などあり得ないという自信—しかし松陰が計画する伏見破獄策、間部要撃策、大原要駕策等は、結局一つとして成功には至らなかった。それでも挫折を経る中で、彼は真に頼むべきものとしての草莽の真価を見定めつつ、封建権力への幻想を完全に断截していくのである。

3

長州藩の武力を借りて討幕の決起の魁たらんとする松陰の企図は、計画が事前に洩れて頓挫し、彼は再び獄に投ぜられることとなった。

政府僕を以て獄に投ず。而して罪名あるなし。僕切に謂へらく、天下に真勤王あり、偽勤王あり。不肖矩方(松陰の諱)と同志の諸士と皆真勤王なり。政府の各位は即ち偽勤王なり。今真勤王、偽勤王に忌諱せられて以てここに至り、真勤王斃る…其の真偽邪正の如きは、天下後世の議將に欺くべからざるものあらんとす。

(戊午幽室文稿, 投獄紀事, 1858年12月, ④500)

藩権力の中枢に位置する世禄の上士層は、所詮真の革命勢力にはなり得ない。官禄に縛せられ既得権に安住する者は、いつの世にあっても真正な改革勢力とはなり得ないのである。

已んぬるかな、已んぬるかな、肉食者は鄙なり、国其れ喪びん。然りと雖も、草莽安んぞ瑞穂を食するの民なきを知らんや。(己未文稿, 赤根武人に与ふ, 1859年2月, ⑤212)

官禄を給せられて決起に踏み切れない輩は、松陰にとって決して真の同志ではない。「肉食

6) 橋本景岳全集, 上巻, 696頁。

者」とは、「素餐」に墮した不忠の士と同義である。松陰はあくまで己の功名や利益のためではない、真実の忠義—それは即ち討幕闘争の大義に殉ずる気高い行為の謂—を貫徹しようと叫ぶ。

吾が輩皆に先駆けて死んで見せたら、観感して起るものもあらん。夫れがなき程では何ぼう時を待ちたりとて時は来ぬなり。且つ今の逆焰（弾圧の炎の意）は誰が是を激したるぞ。吾が輩に非ずや。吾が輩なければ此の逆焰千年たつてもなし…忠義と申すものは鬼の留守の間に茶にして呑むようなものではなし。吾が輩併息すれば逆焰も屏息せようが、吾が輩再び勃興すれば、逆焰も再び勃興する。幾度も同様なり…江戸居の諸友久坂・中谷・高杉なども皆僕と所見違ふなり。其の分かれる所は、僕は忠義をする積り、諸友は功業をなす積り。

（某宛書簡，1859年1月，⑧183-184）

松陰の言う「忠義」とは、決して藩主や天皇に対する無私の忠誠観念というだけの意味ではない。それはいわば正義・大義に対する忠であり、討幕革命の志に対する忠順であると規定できる。それに対する「功業」は、時勢を観望し自己の利得を十分図った上で政治的成果を追求せんとする行為といった含意である。そうした価値基準に照らして見た場合、松門の双壁と謳われた久坂玄瑞や高杉晋作らも、師の真志を受け止めて共に実践に起つ盟友とはみなされなかったのである。

かくして、久坂・高杉のみならず、小田村伊之助・佐世八十郎（前原一誠）・岡部富太郎・来原良蔵・桂小五郎等々、松陰が愛した門人・友人達との間は日を逐うごとに離隔していく。孤独感を深める松陰の苦衷は、あれほどまで人間の誠心を信頼する意識の強かった彼をして、「人間の事、今にて思へば皆々偽なり」（⑧191）という慨嘆の言を吐かせるに至る。彼は離反した友人・門弟らに、次々に絶交状を叩き付けたのみならず、「足下も諸友と絶交せよ。同志の士を峻拒せよ…諸友は与に議するに足らず。政府の人は猶ほ以てなり」（入江杉蔵宛書簡，⑧204-205）と、残った門人にまで絶交を慫慂しているのである。

結局松陰の傍らに留まった門弟は、入江杉蔵（九一）・和作兄弟をはじめ、品川弥二郎・増野徳民・赤根武人など数えるばかりとなった。注目すべきは、この者たちがいずれも正式の長州藩士ではなく、足軽・百姓・医者等身分の低い者であるということである。松陰投獄の際藩庁に抗議して処罰された弟子が8人いたが、そのうち岡部富太郎・佐世八十郎・福原又四郎・有吉熊次郎・寺島忠三郎の5名は、士分なるがゆえにほどなく釈放されたが、彼らはほとんどが師の過激路線についてゆけず破門される。これに対し、低身分であるために釈放がずっと遅れた入江杉蔵・品川弥二郎・吉田栄太郎の3人は、この後も松陰に随従し続けるのである。即ち、藩禄を食む武士を革命主体からはずし、在野の草莽、さらにはこれを媒介として農民層にまで頼り、戮力しようとした松陰の路線に、結局高杉・久坂ら上士層はついてゆくことができなかったのである。

では、松陰が闘争の主たる担い手として強調する「草莽」とは、一体いかなるものを指す概念であろうか。このことを明らかにしておかないと、「松陰が草莽の厥起を期待したのは、それ以外にたのむものなくなった孤立絶望のあらわれであり、本心ではなかった」⁷⁾というような、誤解と偏見に満ちた評価を下してしまう懸念が少なくない。

松陰が「封建の侯伯」や「世禄の武士」、そして「諸友」さえも見限り、「待むべき者は草莽の英雄のみ」（④469）と考えるに至るということは、畢竟松陰自身が自らを「草莽」と見、

7) 遠山茂樹、『明治維新と現代』，123頁。

「草莽」たらんと努めることを意味する。決して自分を「草莽」より一段高い地点に置いて、上から見下ろしながら「草莽」の奮闘を期待する、といった態度ではないことをまず確認しておく必要がある。

さて松陰が「草莽」という語を用い出したのは、かなり早い時分からである。

六国史を読み爰に至り…文人の詩も此の時は唐の真似なるべけれども…君臣の規諫にもならず…気の毒なことのみ…悲しいかな、草莽の臣、終天の憾みなり。

(久保清太郎宛書簡, 1852年11月, ⑦140)

これなどが松陰における「草莽」の語の初出だと思われるが、このあたりの段階ではまだ一般論として述べているだけで具体性に乏しく、さほどの重要性も有していない。やはり問題視すべきは、彼が討幕を表明した1858年夏以降ということになるであろう。

草莽豪傑、上天下諸藩と幕府とを責め、万々従はざれば、死を以て之れを争ふ、正義と謂ふべし。

(戊午幽室文稿, 1858年9月, ④416)

幕府の違勅が周知となった直後のこの時点では、確かに草莽に「正義」ありとされ、松陰自身も大原重徳に送った「時勢論」の末尾に、「草莽の臣、藤原矩方謹んで撰す」と署名している。それでもこの時期はまだ草莽も「天下諸侯」や「藩」などと同列に論じられており、革命推進の主体として草莽を位置づけるところまでは進んでいない。ところが間部要撃策に失敗して、藩権力を敵視し出したあたりからいささかトーンが改まってくる。

当今征夷は跋扈し、諸侯は観望す。皆恃むに足らず。恃むべき所の者は、草莽の英雄のみ。

(巖囚紀事, 1858年12月, ④469)

このように草莽の位置付けが飛躍的に上昇するのであるが、それではそもそも「草莽」とは何か。

「莽」という漢字は「莽(くさむら)」と「犬」の合字であり、本来「兎狩りの犬」の意であったが、やがて「草」とほぼ同義に用いられるようになった。故に「草莽」とは基本的には「草むら」を意味し、転じて「民間、在野」の意を表わす語句となる。辞書では粗方この程度の説明が施されている。

「草莽の臣」という語は、松陰が愛読した「孟子」の中に出てくる語句である。

孟子曰く、国に在るを市井の臣と曰ひ、野に在るを草莽の臣と曰ふ。皆庶人を謂ふ。庶人は質を伝へて臣とならざれば、敢へて諸侯に見えざるは礼なり。

(万章下篇, 第7章)

「草莽の臣」は「市井の臣」と共に、野にある庶民にはかならない。「国に在る」とは、仕官はしないが国都に居しているという意味である。いずれも諸侯に招請されても応ぜず、孤高を守る人物である。一般には、市井の臣と草莽の臣を併せて「草莽の臣」と呼ぶ場合が多い。

日本では「草莽」及び「草莽の臣」がどう定義されているかと言えば、実はこれが多様な見解に分かれ、必ずしも一定していない。しかし私はこと吉田松陰を論ずるに当たっては、草莽を階級概念ではなく意識概念・政治的概念であるとする、高木俊輔氏の意見に与したいと考える。

「草莽」は幕末維新期には豪農商層と理解して大過ないようにみえるが、いわゆる脱藩して活動した、浪士や浪人たちも「草莽」と理解して誤りない。それは「草莽」の概念が、特定の階級をさすという階級概念ではなく、むしろ一つの階級または階層をこえて受容された意識概念、政治的概念であったところに由来している…「草莽」とは官僚体制からはみ出た、あるいははみ出さざるをえなかった多くの人々を指しており…あくまでも「草莽」

と自分を意識すれば「草莽」になりうるといった、意識概念あるいは政治的概念であったとみなすことができる。⁸⁾

「こと吉田松陰を論ずるに当たっては」と断わったのは、ほかならぬ松陰自身が、高木氏の定義するところの「草莽」とほぼ条件が一致するからである。松陰は確かに「官僚体制からはみ出た、あるいははみ出さざるをえなかった」人間であり、「草莽と自分を意識」した人間である。では彼はこのような草莽の務めとは、何であると考えただろうか。

今草茅韋布の士、妄りに朝政を論議し官吏を誹謗するは、分を越え職を踰ゆるの罪固より恕すべからず。然れども其の心を尋ねる時は、或は国家を憂ひ、或は道義を明らかにする如き、深く咎むべきに非ず…恥は吾が心にあることにて、尊位を汗し富禄を費して道を行ふこと能はずんば、何の面目かあらん…罪と云ふものは外に顕はるる如しと云へども、其の一身に止まる。恥と云ふに至りては、心に在りと云へども、其の害民に及ぶ。然れば罪恥の軽重云はずして知るべし。

(講孟余話, 1855年12月, ③228~229)

「草茅韋布の士」とは「草ぶきの家に住み、ぼろをまとった人」即ち「草莽の臣」と同義と見てよい。松陰は、「草茅の士」が国家を憂えるがゆえに政治を論じ、官吏を誹謗するのは所詮軽罪にすぎない、そのようなことを恐れて我が心中にある正義を実践せず、それによって人民に危害を及ぼすがごときは、重大な恥辱である。従って一身を顧みず人民のために天下国家を論じ、かつ行動せよ、それこそが草莽の責務だと説いているのである。

このような「草莽」観を有する松陰が、「恃むべきもの」を失っていく過程で草莽の価値を上昇させていくのは誠に自然なことであり、決して溺れる者が藁をつかむような、絶望の果ての思いつきなどではない。

4

松陰はかつて一否少し前まで一、外国勢力に乗ずる隙を与えることになりかねない内乱は、極力避けるべきだと考えていた。それゆえ、討幕の大義は高唱しながらも現実問題としての討幕戦争については、ぎりぎりの段階までその主張を抑制してきた。しかしその後の展開の中で、幕府の反動と弾圧はますます強まり、奸賊の猖獗は治まる気配を見せない状態である。ここに至って松陰は、“乱世”の到来を悟った。彼はもはや、動乱を回避しようとは考えていない。

今の行成について直様乱に及び候はば、江家(徳川家)は、必ず滅亡すべし…日本は昔より柔弱国なり。大は兵戦少なく、小は殺伐少なきを以て知るべし。殊に中国最も柔弱と称す。柔弱日本の柔弱中国、一百年太平柔弱の極。有志の士共、時を待てとか、朋党に成ってはならぬとか、犬死はせぬとか、種々の弁口扱々塗に塗を付け、猿に木に升る事を教ふる教には之れなくや…血を以て太平を買ふの論は服膺せり。僕未だ人の血を見たる事なく、又己れの血を人に見せたる事なし。遺憾少なからず。

(岡部富太郎宛書簡, 1859年1月, ⑧193)

「血を以て太平を買ふ」とは、実力で既存の秩序を打ち壊し新しい体制を創成する、文字通り流血の暴力革命の謂である。現下の混乱を打開し、柔弱の平穏ではない、活力ある太平を実現するためには、まさしく人も己れも鮮血を迸らせる武力闘争が不可欠であると、松陰は門弟

8) 岩波書店、『幕末の志士』6~7頁。

の岡部に教え諭しているのである。

今の世界、老屋頽廈の如し。是れ人々の見る所なり。吾れは謂へらく、大風一たび興って其れをして転覆せしめ、然る後朽楹を代へ敗椽を棄て、新材を雑へて再び之れを造らば、乃ち美観とならんと。諸友は其の老且つ類なるものに就き、一楹一椽を抜きて之れを代へ、以て数月の風雨を支へんと欲す。是れ吾れを視て異端怪物と為して、之れを疎外する所以なり。(己未文稿、子遠に語ぐ、1859年1月⑤178)

門下の俊才入江杉蔵に送ったこの文章は、体制変革に対する松陰の熱情と基本的な認識を表明して余りあるものがある。腐敗混濁の極に達した現体制を「転覆」して、清新な社会秩序を再構築するならさぞかし「美観」であろうに、部分的修正・改良で当座を凌ごうとする「諸友」にとっては、かかる弥縫の策こそまさに「功業」の証であり、根本的変革を望む者を「異端怪物」視して排斥しようとするのであろう。松陰は深い慨嘆の中から、必死で乱世の到来、革命情勢の高まりを待望している。だが2月になり3月が過ぎ4月の声を聞いても、事態は望む方向には少しも進まず、かえって亡国の様相が濃くなるばかりである。

天下將に乱麻とならば、大いに吾が羣力を尽すべき所なり…唯今の勢は和漢古今歴史に見及ばぬ悪兆にて、治世から乱世なしに直ぐ亡国になるべし。是れが苦心なり。何となれば、外墨夷(米国)幕府を箝制し、幕府天朝と諸侯とを箝制し、諸侯国中の志士仁人を箝制す。夫れ故、今の諸侯が心ならずも幕府に制せられて天朝に不忠をする如く、往先墨夷へ制せられようかと、夫れのみ痛心なり…墨夷もし徳川を滅せず、深く援救して兵械糧食を与え属国とする時は、坐ながら滅する道理なり…何卒乱麻となれかし。乱麻となる勢御見すゑ候か。治世から直ちに亡国にはならぬか。此の所、僕大いに惑ふ所なり。

(野村和作宛書簡、1859年4月、⑧288~289)

松陰の焦燥は、現支配体制を墨守しようとする勢力が米国の威圧に屈し、売国行為に走る懸念によって一層昂進する。かかる国家滅亡の危局を脱するためにも、「乱麻」即ち革命的動乱の状況がどうしても必要なのである。

天下の大勢は大略知れたるもの、実に神州の陸沈憂ふべきの至りなり。幕府遂に人なし。瑣屑の事は可なりに弁じも致すべけれども、宇宙を達観して大略を展ぶるの人なし…徳川存する内は、遂に墨・魯・暗・拂(米露英仏)に制せらるることどれほどに立ち行くべくも計り難し。実に長大息なり。

(北山安世宛書簡、1859年4月、⑧292)

徳川の最大の罪責は、現今の危難を救う能力の喪失を全く自覚せず、売国と引き換えに己の権勢を護持しようとしていることである。それはまさしく、「どうでもかうでも日本を弱めずゑて他夷へ渡す」(入江宛、1859年5月、⑧327)魂胆としか理解できない。とにかく徳川幕府の寿命が伸びれば伸びるほど、西洋列強の侵食により「神州陸沈」即ち日本覆滅の危機は強まっていくのであるから、ここは何としても、天下の大動乱を惹起するよう死力を尽さねばならない。

では、動乱の情勢を現出し而して革命的争闘へ突き進む、その主動力はいずこに求めるべきか。「封建の侯伯」や「世祿の将士」が否であることは既述した。だが門弟・友人の多くも松陰から離れ、最後まで奮闘した入江・野村の兄弟もついに下獄、敬愛措く能わざる藩公(毛利敬親)にも一松陰の個人的感情は別として一闘争の旗手としての役割は期待し得ない。藩の官僚層などは、無論言語道断である。

吾が公に直に尊攘をなされよといふは無理なり…政府は勿論、食祿の人に対しては何も言はぬ。

(入江宛書簡, 1859年4月, ⑧312~313)

「食禄の人」とは、藩庁の上層部ばかりではない、扶持米を食む藩士は全て含まれるのであり、松陰の父や兄、叔父等も入ると言うべきであろう。若年時より、「肉食者」、「素餐」、「天の賊民」、「国の大蠱」等々の痛罵を浴びせてきた世俗の士族層を、松陰はここで完全に革命主体から排除したと言ってよい。さすれば、徳川の売国政治により危殆に瀕している日本の民族的苦難を救う起死回生の策は、「草莽崛起の英雄」以外になし得ないこととなる。

天朝も恐れ多きことなれども、公卿間多く貪濁の風已まず、正論遂に立たず…君側政府等の俗人蒼蠅し、蒼蠅し。豈に掃尽すべけんや…今の諸侯にて尊攘を云ふは、実に蝦蟇が天下を狙ふなり…然れども神州の陸沈を坐視しては如何も居られぬ故、国家へ一騒乱を起し人々を死地に陥れ度く、大原策・清末策・伏見策色々苦心したるなり…着眼は実に草莽崛起にあり。(小田村伊之助・久保清太郎宛書簡, 1859年3月, ⑧273~274)

松陰の言う「尊攘」は、この段階では単に天皇を尊崇し外敵を掃討する行ないの謂ではない。それは国家存亡の闘いであり、幕府を討滅し「今の世界を一変」(⑧295)させ、而して「唯だ当に生靈を愛護して以て一方を保全」(⑤304)することを目的とした民族革命の別称となっているのである。

吾が輩程に志を篤くし、時勢を洞観したる人はなし…且つ今迄の処置遺憾なきこと能はず。夫れは何かと云ふに、政府を相手にしたが一生の誤りなり。此の後は屹と草莽と案をかへて、今一手段遣って見よう。

(野村和作宛書簡, 1859年4月, ⑧307)

深い悔恨の果てに草莽崛起の路線に想到した松陰であるが、揺らぎかけているとはいえ幕府権力は相当に強靱である。草莽の有志の力だけでこれと争い、打倒することは至難であろう。単なる政治権力の奪取ではなく、「老屋頽廈を転覆せしめ」た上で「新材」をもって「美観」を顕現する大変革を遂行する以上、最終的にその主体をいかなる勢力・階層に求めるべきか。そうした思索の過程で松陰の脳中をよぎったのは、かつて見聞した諸国の百姓一揆の姿であり、累年の虐政に苦しみながらも着実に高まってきている農民層のエネルギーではなかつたらうか。

只今の勢にては諸侯は勿論捌けず、公卿も捌け難し。草莽に止まるべし。併し草莽も亦力なし。天下を跋涉して百姓一揆にても起りたる所へ付け込み、奇策あるべきか。(野村・入江宛書簡, 1859年3月, ⑧264)

既に松陰は「百姓一揆の如きは…風起り、火燃ゆるが如し…其の已に起るや、草茅屋舎一掃残すことなし。実に恐るべし」(②138)と、農民一揆の戦闘性を鋭く認識し、かつその正当性にも思いを致していた。南部一揆の指導者を秦末の農民反乱の中心人物「陳涉・呉広」に擬した松陰にしてみれば、秦朝ならぬ徳川政権倒滅の闘いに農民の戦闘力を加えようと思つたとして、何ら不思議はないはずである。

松陰が最終的に到達した革命闘争の路線は、草莽と百姓一揆の連合戦線であつたと捉えても誤りとは言えないであろう。いかに未知の力であり、かつそれが茫漠としたものであつたにしても、武士があくまで支配・統治の対象としてしか認識できなかった農民を、共闘の相手として位置づけようと発想したことは尋常ではない。半士半農の生活体験を身体に刻みつけて成長してきた松陰が、救国闘争の駆動力として士農の同盟を模索しかけたということは、極めて大きな意義を有すると思われる。草莽の中には、武士以外の諸層の有志が含まれることを考え合わせるなら、それはいわば連合戦線であつたと言ひ得るであろう。「普天率土の万民、貴賤尊卑の隔限なく、天下を以て己が任となす」という松陰に固有の万民論のテーゼは、極限の実力

闘争における捨身的実践を導くものだったのである。

おわりに

これまで吉田松陰の理想を、彼の生きざまをも視野に入れつつ、4部構成で考察してきた。惜しくも彼自身は1859年10月、安政の大獄に連座して刑場の露と消えた。「身はたとひ武蔵の野辺に朽ちぬとも、留め置かまし大和魂」の歌を冒頭に、半紙に認ためた彼の遺書とも言うべき「留魂録」は、同獄の囚人沼崎吉五郎に託され、それが世に知られたのは沼崎が流刑地から帰還した後であり、既に明治、文明開化の時代となっていた。

松陰の思想と悲願は、数多の門弟・友人らによって正しく継受され、明治国家日本において成就したと言えるであろうか。この問いに対する答は実は中々に難しく、単純にイエスともノーとも言えないものがある。

明治維新から130年余、現代に生きる我々が吉田松陰の人物と思想をいかに受けとめ、自らの課題ともなすかによって、その答はおのずから定まってくるに相違ない。